

小池 宏明 牧師

主イエスが語られた「いなくなった羊」のたとえ、直後には、「失くした銀貨」のたとえが続いている。ここには神様が、私たちをどのように見ておられるのかが記されている。羊のたとえ、銀貨のたとえ、似たようなたとえが、繰り返されているのは強調して伝えたいことがあるからだ。一つは、見つけるまで、熱心に、一生懸命、注意深く捜す、神様を強調している。羊を100匹持っているのだから「一匹いなくなっても仕方ないや」ということはない。ドラクマ銀貨一枚を「やがて見つかるだろう」と放って置かず捜し続ける主なる神様の姿が強調されている。

もう一つの強調点は、見つけたら、大喜びすることである。友だちや近所の人まで集めて、喜びを分かち合う。「一緒に喜んで下さい、いなくなったのが見つかりましたから。」

実は、たとえに出て来る羊は、あまり賢い動物ではない。羊飼いに守られていないと、狼など獣に襲われて生き延びることができないのだ。99匹を置いて、一匹を捜す羊飼いの姿は、当時としては珍しいことではない。99匹は安全な所に居てもらい、その上で道を外した羊を捜し回る。羊は迷子になり易い生き物だ。愚かな失敗を繰り返して道に迷う人間のようである。

また、ドラクマ銀貨一枚は一日働いた賃金に当たる。貧しい女性にとっては、とても大事な銀貨だ。パレスチナ地方における当時の家は、窓が無いか、とても小さな窓があるだけで、日中でも、念入りに捜すには、燭台の明かりが必要だ。その女性は、明るくして注意深く掃いて、見つけるまで捜すのである。銀貨は、どこかに転がっているだけで、持ち主が必死に捜していることに、気付くはずもないし、気付けない。人間は気付いていなくても、主なる神様は捜し続けているのだ。

主なる神様は、捜し求める神様なのである。捜し求めて、見つけるまで捜して、必ず見つけ出して、大喜びする、そんな主なる神様なのだ。そして、一人が救い出されたならば、天の御国においても、教会においても、共に喜びを分かち合いたいと願われているのである。